

13

くらしと海のかかわり

海をどのように利用してきたの？

■江戸時代の水運

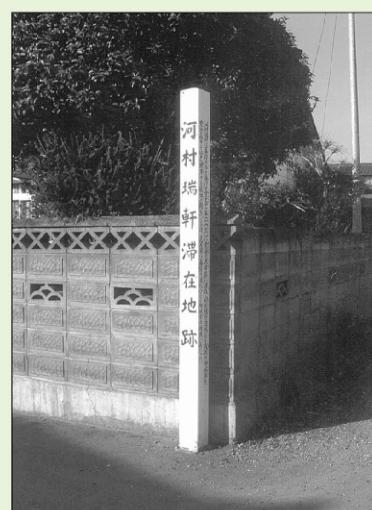
江戸時代の経済活動は、江戸と大坂を中心に全国的な規模で動くようになりました。なかでも船による物資の大量輸送は、経済活動に大きな影響を与えました。

◆航路の整備

全国屈指の大河である阿武隈川は、上流部に急流があり、また、河口は砂によって浅瀬になりやすいなどの問題を抱えていました。そこで幕府は、土木工事などで業績のあった河村瑞賢（瑞軒）に航路の整備を命じました。河村瑞賢は阿武隈川を詳細に調査して川を改修し、航路を確立させました。



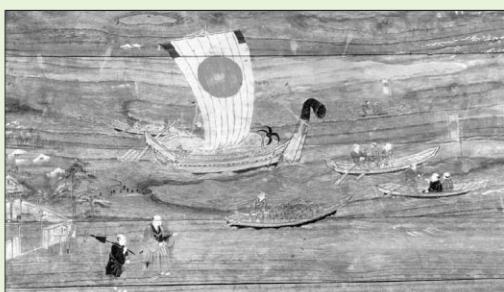
●阿武隈川図
(宮城県図書館所蔵)



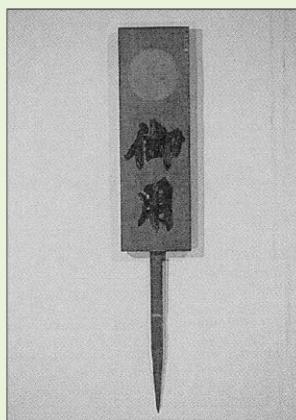
●河村瑞軒滞在地跡
(亘理町荒浜)

◆運んだもの

幕府は、阿武隈川上流にある天領の御城米（幕府の直轄地から江戸に輸送された年貢米）を川の水運を利用して運びました。阿武隈川河口の荒浜は、川から海上輸送への積み替え地点として重要な場所でした。



●御城米積み替え作業絵馬（福島県国見町深山神社所蔵）



●御城米絵符（武者惣氏所蔵）
この札のついた荷物は特別な扱いを受けました。

■貞山堀運河

◆作った目的

伊達政宗が本拠を岩出山城から仙台城に移す計画の中で、築城と城下町建設に必要な物資の調達を目的として、慶長2年（1597年）に阿武隈川河口部納屋と名取川河口部閘上との間で造り始めました。明治17年（1884年）に全体が完成するまで、287年の歳月を要しました。

◆運んだもの

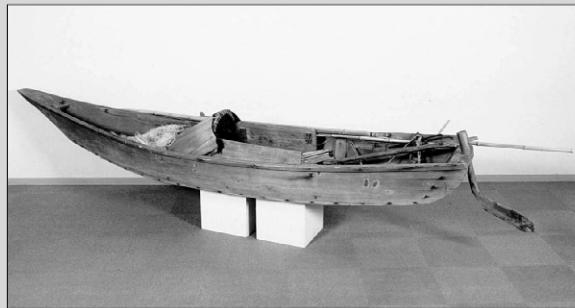
阿武隈川で運ばれた木材や物資が貞山堀から名取川、広瀬川をさかのぼり仙台城に運ばれました。その後、阿武隈川の舟運が発達して、御城米の運搬などで利用されました。

13 くらしと海のかがわり

■海のめぐみ

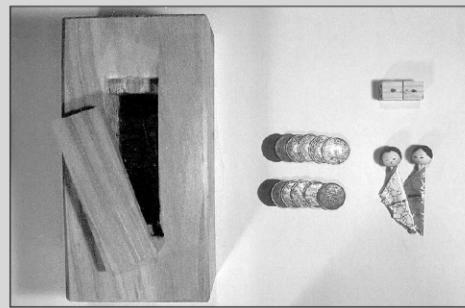
◆昔の漁業

仙台湾南部海岸の中程で太平洋に注ぐ阿武隈川は、サケが遡上する恵みの多い川として古来から漁が行われてきました。阿武隈川河口付近では、サケの流し網漁がヒトリヌリという船で行われていました。常に生命を落とす危険のある漁にたずさわる人々は、船の守護神フナダマサマなどの信仰により、漁の安全と豊漁を願っていました。



●ヒトリヌリ

漁は一人で座位の形で行われました。このためヒトリノリ（一人乗り）といわれますが、なまってヒトリヌリと呼ばれています。



●フナダマサマ（船靈様）

木枠の中に紙びなやサイコロ、お金を入れ、船に取り付けていました。不漁や凶事が続いたときには「フナダマサマ」を入れ直したそうです。

◆今の漁業

仙台湾南部海岸の海岸線周辺の漁業権漁業は、「あかがい漁業」「うばがい（ほっきがい）漁業」などの貝漁を中心となっています。平成10年から平成14年までの山元町における魚種別生産量を見ても、海岸線近くの貝漁が中心になっています。中でも「うばがい（ほっきがい）漁業」は減少傾向にあるものの、全体漁獲量の半数程度を占めています。

単位:t

	山元町の魚種別生産量				
	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年
さけ・ます類	120	56	64	97	143
ひらめ・かれい類	16	17	50	39	46
ぶり類	4	4	12	21	9
あかがい	3	4	6	1	—
うばがい(ほっきがい)	308	351	319	257	234

資料：東北農政局統計情報部「宮城農林水産統計年報」

◆これからの漁業は？

- 「捕る漁業」から「育てる漁業」への取り組み
- 私たちの食生活と漁業との関わり
- くらしの中での水との関わりの見直し